

複眼 時評

数学者のノート

人文科学研究所 藤原辰史

一九三八年生まれの数学者のノートを先日見せていただいた。京都大学でも教鞭を執っていた数論の専門家は、もっぱらペンとノートを使って難問に挑み、世界中の数学者たちを驚かせる論文を発表した人物である。「世界的な」という形容詞を使っても全く違和感のない数学者と一昨年に出会い、穏やかな笑顔と風貌にわたしはすっかり魅せられた。いろいろなお縁があって、先日「百世にお邪魔した」と、ノートを見せてくれたというお話を伺ったのである。

「これほどまでに重裝備になったのだろうか。自分の蔵書が切り離された獄中で記憶を頼りに後世に残る理論を作り上げた哲学者もいるというのに。膨大な資金と人材と時間を投じて、巨大な科学を生み出すような流行が生まれたのは、少なくとも日本では第二次世界大戦の最中からである。国が設立したもので、たとえば、一九一七年三月に理化

学研究所、一九二八年四月に海軍航空機試験所、一九二九年四月に陸軍技術本部、陸軍科学研究所、一九二〇年九月には栄養研究所のほか、國試試験場、林業試験場、陶磁器試験場などがつきつきに誕生している。一九三三年からは、日本学術振興会による補助金

らかなに波打つ岸辺の光景、ときを激しく波が叩く荒海の光景。アイディアが渾々と湧く泉のようにな、ペンを、それを整理してしきの段階にもっていくと、その陳列棚のようなペンを、勢いよく筆が進んでいる目、なんども同じ字をなぞる目、筆がとまると動かない目、どのペンを美しく、どのページにも緊張が走る。

いつから、研究者は、その小さな弱い肉体だけでは物足りなくなってきたのだろうか。いつから科学は、これほどまでに重裝備になったのだろうか。自分の蔵書が切り離された獄中で記憶を頼りに後世に残る理論を作り上げた哲学者もいるというのに。膨大な資金と人材と時間を投じて、巨大な科学を生み出すような流行が生まれたのは、少なくとも日本では第二次世界大戦の最中からである。国が設立したもので、たとえば、一九一七年三月に理化

ともしついでに強力な暴力に對抗するにもはや巨大な科学だけでは時代遅れであり、端的に言って、そんなものにはかり資金を費やす国は危険であるといわざるを得ない。何十時間も推敲した洗練された言葉の力と、何十時間も耐える交渉の力がなければ、そんな暴力には立ち向かえないのにもかかわらず、暴力装置に暴力装置を対置するだけでしか安全保障を考えられないのは、時代錯誤以外のなにものでもない。あの数学者のノートのような思考の深化による突破力と工夫を生み出せない自分を、わたしたちは巨大な設備と労働力の購入によってごまかしてきたのではないだろうか。そしてその暴力の担い手からさえ、資金を積むことを厭わなかった研究者たちは、大所帯の研究室を運営するよりも、また、おのれの肉体で考え、ことを忘れてはいなかったのだろうか。



(ふ)じはら たつし 人文科学研究所准教授。専門は農業史・ドイツ現代史

左記へ確認印をお願いします。